

$$S = \frac{100 \left(\frac{1-R^n}{r} \right)}{100R^n - M} \quad M = 100 R^n - \frac{100 \left(\frac{1-R^n}{r} \right)}{S}$$

$$C = 100 \left(\frac{S-n}{S} \right) \%$$

$$= 100 - \frac{n(r)(100R^n - M)}{1 - R^n} \%$$

ただし $R = 1 - r$

10. 赤血球寿命の延長を示した多血症の2症例について

斉藤 宏

(名大・放)

山田 美雄

(名大・一内)

山口 宏 三島 厚

加藤 茂生 田宮 正

(名大・放)

赤血球寿命を $DF^{32}P$ により各種疾患で測定していたが一般には寿命の短縮するケースばかりであった。しかし1973年に1例、1976年に1例、赤血球寿命がそれぞれ、196日と172日との延長症例を経験した。これらの症例はともに真性多血症であった。第1の症例は、はじめは測定のまちがいであろうと放置していたが、第2例を経験したので再び当時の成績を慎重に検討した結果、まちがいのないことがわかった。これらの症例以外の他の11例の真性多血症では赤血球寿命は 86 ± 19 日で63日から125日の幅があつた。これらの寿命延長を示した2例では8日と7日とそれぞれ短かい赤血球寿命をもつ群もみつかった。196日の寿命を示した例で2年後、瀉血のみで小康状態にあるとき再検した赤血球寿命は130日であった。これは正常人の上限値に相当する。

赤血球寿命の延長に関する報告はこれまでにない。真性多血症で赤血球量が増加するのは、造血亢進によるものであるが、しかし、寿命の延長も赤血球量増加の一因となりうるということが明らかになった。

11. 急性小児片マヒの脳 RI アンジオグラフィーと脳スキャン

二谷 立介 森 厚文

前田 敏男 小林 真

久田 欣一

(金大・核)

加藤 貞人 岡本 正樹

(同・小児)

杉野 実 木村 信

(同・脳外)

急性小児片マヒ症候群の脳スキャンについて検討した。10例中6例に脳スキャン異常を呈した。また RI アンジオグラフィーを併用した6例のうち、1カ月以内に施行した5例はすべて血管閉塞のパターンであった。CAG を施行した8例中血管閉塞を証明したのが3例であることを考えると、脳スキャン、特に RI アンジオグラフィー併用の脳スキャンが非常にこの疾患の診断に有用であることが判った。また発作後の脳スキャン、RI アンジオグラフィーの所見の推移を見たが、成人の脳梗塞でいわれているような、2～3W で異常出現率が peak となり以後減少していくという傾向ははっきりしなかった。これは症例数が少ないことにもよるのだろう。ただ1カ月さらにそれ以上たつと、脳スキャン、RI アンジオグラフィーは臨床症状の軽快とともに、正常化するようである。小児は、その特異な条件のために今まで RI アンジオグラフィーを行なわない傾向があつたが、ちょっとした小児科医の協力があれば解決できることもあり、これからは脳スキャンに RI アンジオグラフィーが併用されるべきである。